

1. 活動の背景

桜の老木が並木をなす古い宿場町、通りの両側を水路が音をたてて流れ、鯉の姿を見ることが出来る。ここは岡山県真庭郡新庄村に残る旧出雲街道の宿場町「新庄宿」。桜並木は「がいせん桜」である。この歴史情緒豊かな通りは、県の「町並み保存地区」をはじめ、「歴史国道」や「日本の残したい音風景百選」に指定されており、本陣、脇本陣など宿場町の景観が大切にされている。そんな古い家並みが軒を連ねる通りの一角に一件の草(茅)葺き屋根の民家が残されている。昔の民話に登場しそうなこの民家は、かつての宿場町の景観や人の生活を現在に伝える貴重な遺産的資源であると同時に、桜並木や宿場の家並みと一体となって、歴史的な雰囲気醸し出し、桜の咲くころをはじめ、初夏の新緑、夏の濃い緑、秋の紅葉、冬の積雪と「絵になる宿場の風景」となっていた。しかし、老朽化による痛みもひどく、現在この愛すべき民家の風景は、存亡の危機に瀕している。

霊峰大山へと連なる皆ヶ山、蒜山三座などの緑豊かな山々、美しい高原風景が広がる蒜山地域、吉備高原へと連なる里山丘陵地、中国山地の谷間を蛇行して流れる旭川とその河畔に開けた小盆地、高瀬舟や出雲街道の往来で栄えた古い家並みなど、真庭地域には懐かしくも美しい日本の原風景が今も残る。

新庄村を含む真庭地域には、大いなる大自然を背後に美しい農山村の風景が開けている。

この50年あまりで、日本の自然や風景は大きく変わり、昔懐かしい農村風景の消失とともに、地域文化や「日本の美」も失われつつある。それは、地域資源の損失であるとともに、「心のふるさと」の喪失でもある。

真庭遺産研究会では、広く真庭地域内の住民および企業・事業所、行政関係に呼びかけ、“美しい郷土の自然や景観(風景)像について、様々な分野から研究・検証を行い、自分たちの住む地域の特色などを考え再認識することで、望ましい「ふるさと」の将来像をイメージすべく、活動を展開している。

真庭地域(新庄村を含む)は、岡山県の北部に位置する圏域人口5万人強の中山間地域で、10の町村より構成されている(真庭郡9町村+北房町)。

真庭地域では、真庭郡町村会、岡山県真庭ふるさと振興協会などを組織して広域(行政)連合や広域的な観光地形成を進めてきたが、地形的・距離的な隔りもあり、総合的な行政計画にもとづく「まちづくり」は遅れているのが現状である。

その一方で、真庭郡北部に位置する蒜山高原は年間250万人に及ぶ観光行楽客が訪れており、その客の流れを活かした観光振興や地域づくりが課題となっているほか、豊かな自然や歴史的資源、農村文化を生かした都市農村交流やグリーンツーリズム(農村旅行)に期待がよせられており、これら次世代の農村観光交流に対応できる「まちづくり」、「地域づくり」が望まれている。

一方で、現在、真庭郡内には金属板で被われながらも、500~600棟の茅葺き家屋が残存している。その中には、文化財クラスの立派な茅葺き民家も存在しているが、空家予備軍や崩壊寸前の廃屋も多く見られる。この傾向は、真庭地域だけでなく、中四国、九州、近畿地方の山間部に広くみられることがわかっている。

廃屋は、解体して処分するとなると多額の費用がかかるため、当分の間は物置などとして利用されると考えられるが、急速に痛みが進行し、風雨にさらされるうちに、古材(建築部材)として活用できなくなる上に、景観や地域イメージを悪化させることとなることから、これら草葺き民家について資源活用方策が必要とされている。

2. 活動の経緯と目的

(1) 目的

真庭地域には、岐阜県の白川郷や京都府の美山町、福島県の大内宿のように有名な茅葺きの観光地は存在しない。しかし、多くの人は草葺き屋根（茅葺き屋根）について「懐かしい田舎の原風景」としての憧れや関心をもっている。

草葺き屋根（茅葺き屋根）については、身近な存在ながら、わからないことが多く、その保存や修復について、あきらめている人が多い。

平成15年4月、新庄宿での草葺き民家の保存活動からスタートした草葺きサミット関連の活動は、一軒の草葺き民家の修復保存だけを目的とするものでなく、草葺き屋根の技術などの伝統技法などを時代に対応したスタイルで伝承しようというものである。

さらには、材料となる茅（ススキ）の供給地である里山草原（草刈り場）の環境保全をも目的としたグラウンドワーク活動でもある。

本活動は、再利用されることなく廃屋化し、風雨にさらわれ朽ち果てていく草葺き民家について、資源として有効活用し、地域づくりを進めるとともに、草葺き屋根の見える美しい日本の風景づくりや「日本の美の伝承」を考えることで「美しい日本の自然と風景の保全再生」を目的としている。

(2) 活動の経緯

草葺きサミットは、岡山県新庄村の町並み保存地区（新庄宿がいせん桜通り）に残る茅葺き屋根の民家の保存を考える中ではじめた環境文化活動である。

当初は、新庄村の草葺き民家の保存が第1目標だったのであるが、草葺きについて考えていけば、いくほど奥が深く、自然建築素材や農村生活文化、住環境、建築物からのアプローチや、農村景観（風景）と草原の環境保全など環境面からアプローチも可能である。

美しい日本の農村原風景のシンボルとなる草葺き屋根、そして、全国に広く見られた里山草原、今これら懐かしくも美しい日本人の「心の風景」が急激に見られなくなりつつある。あわせて、古き良き時代を偲ぶ農村文化や風物詩も失われつつある。

混迷する経済社会のもと「草葺き屋根」にスポットライトをあて、景観保全、自然保護、建築文化振興、伝統文化継承、地域活性化、農村バイオマス資源の活用などをテーマにのどかに活動を展開している。

真庭遺産研究会では、平成13年3月より、出雲街道の宿場町（新庄宿）に残る草葺き屋根の民家の保存活動を展開している。

活動を展開する中で、平成14年の夏あたりから、草葺き屋根に関心の高い個人や団体を招いて草葺きサミット（草葺き屋根のシンポジウム）を開催してみようという話しになり、自分達はもっと草葺き文化について勉強する必要があるということで、シンポジウムの準備イベントとして、平成15年3月に「グラウンドワーク草葺きフォーラム」を開催することができた。このフォーラムは、「草葺き屋根」にスポットライトをあて、里山の自然保護や農村景観の保全、資源循環型社会システムの構築をはかることを目的とした環境文化フォーラムであった。草葺き屋根の保全は、その材料の供給地である茅刈り場（里山草原）にもつながる活動である。

「新庄宿の草葺き民家の風景保存」からスタートした草葺きサミット関連の動きも、「茅場（里山草原）の保全」、「草葺き技術の伝承や応用」、「次世代草葺き住宅」、「草葺き屋根（農村原風景）保全の社会システム」、「田舎暮らし、都市農村交流」などの議論を重ね、「草葺き紀行」の開催や関連シンポジウム、フォーラムへの参加などの活動を展開していくにつれ、「草葺

き屋根の修復再生」は技術的にも経済的にも無理なくできるという確信を得ることができた。

「茅場の保全再生」や「草葺きネットワーク」の構築などにより、修復工事技術面、工費面での課題に対する回答が見えてくるに中、「保全再生の対象となる草葺き屋根はどこにある」という壁にぶつかることとなった。そんな中、全国的に見て岡山県は、茅葺き屋根の民家が多い地域とされていることを知るにあたり、「トタン（金属板）を被せた草葺き民家も保存修復の対象にすべし」という考えを強めた。実際、真庭地域には、風景的にも優れた草葺き屋根の民家として、白石邸（勝山町）、金田邸（落合町）など現存していますが、西田邸（湯原町）や池田邸（川上村）のように金属板を被せた建物にも素晴らしい草葺き民家がみられる。トタン（金属板）を被せたものであれば、ほかにも素晴らしい草葺き民家は多くある。それは真庭は木材の産地であり、立派な建築文化があったからである。中にはトタン（金属板）を剥がし、草葺き屋根を葺き替えるだけで、素晴らしい農村風景が蘇る環境にある民家もある。

これまで、草葺きサミット関連の活動で集めた草葺きノウハウや「茅場」の情報を整理し、草葺き民家や「真庭遺産」を活用した「スローな田舎暮らし文化」やローテクによる環境ビジネスを考えながら、グリーンツーリズム、都市農村交流のあり方についても方向性や実践モデルを示すことで、草葺き民家の保存と活用の新しい仕組みづくりを考えてきた。これからは、草葺き民家を象徴の一つに「美しい日本の自然や風景を保全し再生する」国民的な運動へと発展させたいと考えている。

3 . 活動の内容

(1) 平成11～14年度の活動内容

1) 地域遺産の掘り起こし

真庭遺産研究会は、地域住民が大切にしたいと思っている故郷（真庭）の自然や景観、風物詩、原風景、歴史的資源、古民家、大きな木、伝統技法などの遺産的資源を調査し、紹介することで、保全活用をはかることを目的に、平成11年5月に設立した任意団体である（前身の真庭遺産の会は平成7年発足）。

研究会の主たる活動範囲は、岡山県真庭郡で、郡内自治体（9町村）や岡山県真庭地方振興局との連携で調査研究活動や環境保全活動を展開しており、平成11年に郡内9町村（新庄村、美甘村、勝山町、川上村、中和村、久世町、落合町、湯原町、八束村）と北房町に残る地域遺産を訪ねる真庭遺産視察会を開催するほか、久世町、落合町、新庄村、勝山町での環境資源冊子作成を行うなど、情報発信活動や啓発活動を行っている。

また、平成13年3月より山陽新聞において、真庭に残る美しい景観や文化財を写真と文章で紹介する「まにわ遺産」を連載紹介しており、現在（平成16年3月）までに79ヶ所の真庭遺産を調査し、紹介する記事を掲載している。

2) 地域環境の保全活動

「知ってもらっただけで、保護保全につながるのか」と言われるかもしれないが、多くの人が、それぞれの得意分野で見つめることで、保存する価値がわかるものも多くある。知識だけでなく、感性や「心」でみることは大切である。眠っていた感性が呼び覚まされることもある。まずは、多くの人に本当のよさ知ってもらうこと、そこで生まれる人々の交流。それが地域のエネルギーとなる。これも地域遺産（例えば真庭遺産）の魅力である。

真庭遺産研究会は、調査紹介活動と平行し、シンポジウムや環境セミナーを開催し、地域環境の保全を進めている。

主な活動として、平成11年11月の景観シンポジウム「蒜山地域の景観の保全と形成を考える」の開催をはじめ、郡内各地で古道（旧街道）シンポジウム、里川ワークショップ、水辺の環境学習会、希少植物調査会、古民家保存調査会を開催している。

また、蒜山地域では景観保全活動や河川水辺環境を中心とした環境パトロール、水辺（里川）自然観察会を開催し、清流環境保全に向けたワークショップや蒜山地域の景観保全、不法投棄の防止を目的に「地球環境セミナー」を開催している。

3) 草葺き民家検討会の開催

真庭遺産研究会では、発足時より郡内に残る古民家について、掘り起こし活動を継続しており、平成13年春より草葺き屋根にスポットライトをあて保存活動を続けている。

この活動は、草葺き文化を時代に対応したスタイルで伝承しようというものであり、さらには、材料となる茅（ススキ）の供給地である草刈り場（里山草原）の保護保全にも取り組み、日本の原風景を守ろうという活動として展開している。

真庭遺産研究会では、平成13年春より、出雲街道の宿場町（新庄宿）に残る草葺き屋根の民家の保存活動を展開しており、建築士や学識経験者を交えた古民家の見学会などワークショップを開催している。

活動を展開する中で、平成14年の夏あたりから、草葺き屋根に関心の高い個人や団体を招いて草葺きサミット（草葺き屋根の全国シンポジウム）を開催してみようという話しになった。

そして、自分達はもっと草葺き文化について勉強する必要があるということで、研究会を中心に、住民・NPO等、大学教授、建築士、地元学識経験者、郷土史家、地域づくりプランナー、環境カウンセラー、役場関係者などに呼びかけ、「草葺きサミット準備会」を組織し、草葺き屋根の風景の保全と再生に向けた調査研究活動を展開している。

「草葺きサミット準備会」は、真庭遺産研究会を中心に住民・NPO等からなる組織で、草葺き屋根の風景の保全と再生に向けた活動を展開しており、平成15年春から平成16年春にかけて、岡山県内で草葺き民家にスポットライトをあてた文化フォーラムやシンポジウムを開催している。

4) 草葺き民家の保存活動

一昨年4月、新庄宿での草葺き民家の保存活動からスタートした草葺きサミット関連の活動は、一軒の草葺き民家の修復保存だけを目的とするものでなく、草葺き屋根の技術などの伝統技法などを時代に対応したスタイルで伝承しようというものである。

さらには、材料となる茅(ススキ)の供給地である里山草原(草刈り場)の環境保全をも目的とした活動で、「美しい日本の自然や風景の保全再生」や「日本の美の伝承」をはかろうというグラウンドワーク活動でもある。

具体的な保存活動としては、建築士や学識経験者の協力のもと、新庄宿草葺き民家の実測調査を実施している。そして、これ以上の老朽化を防ぐため、平成13年9月に工務店に依頼して屋根にシート掛けを行なっている。

真庭遺産研究会としては、会員有志でグリーンツーリズムを推進する農業法人を設立するとともに、所有者と交渉し、建物の所有権を移譲した上で、農業法人を事業主体に「田舎暮らし」や「街道の文化」、「四季の風情」を楽しむ「茅葺き風景庵」として修復活用する計画である。

5) 交流フォーラムの開催

新庄宿での草葺き民家の保存活動は、一軒の草葺き民家の修復保存だけを目的とするものでなく、街道の景観保全にあわせて、草葺き民家そのものを時代に対応したスタイルで伝承しようというものである。さらには、材料となる茅(ススキ)の供給地である里山草原(草刈り場)の環境保全をも目的とした活動で、日本の農村原風景を守ろうというグラウンドワーク活動でもある。

シンポジウムの準備イベントとして、平成15年3月15日、16日と「草葺き屋根」をテーマにブライアン・ウィリアムス氏(風景画家)、吉村元男教授(鳥取環境大学)、宇田英男教授(鳥取短期大学)を講師に、茅葺き職人の長崎真知夫氏をゲストをとした「グラウンドワーク草葺きフォーラム」を開催している。

「グラウンドワーク草葺きフォーラム」は、草葺きサミット準備会が開催した「草葺き屋根」にスポットライトをあて、里山の自然保護や農村景観の保全、バイオマス資源の活用など資源循環型社会システムの構築をはかることをテーマとした交流型の環境文化フォーラムで、平成15年度に実施した草葺き文化の全国シンポジウム開催に向けた情報交流とネットワークづくりを目的としていた。

3月15日は、新庄村ふれあいセンターを会場に、中国地方、近畿地方から草葺き屋根の大好き人間や活動団体を招いての問題掘り起こし型のフォーラムを開催し、7つの分科会に分かれて意見交換を行った。

- 第1分科会(草葺き屋根の景観保全について)
- 第2分科会(草葺き民家と農村文化について)
- 第3分科会(草葺き文化と里山草原について)
- 第4分科会(次世代の草葺き建築物について)
- 第5分科会(新庄宿での草葺き民家活用について)
- 第6分科会(21世紀環境材と森の再興について)
- 第7分科会(民家再生リサイクルと地域振興について)

また、このフォーラムの場において、以下の「バイオマス草葺き宣言」を採択することができ

た。「バイオマス草葺き宣言」は、以降開催する草葺きサミット一連の行事において、参加者共通の理念として生かされている。

3月16日は、美甘宿と新庄宿の町並みを見学した後、積雪の残る中で茅場となる里山草原を見学し、山の家（草葺き民家風の交流施設）やふれあいセンターで意見交換会を開催している。

バイオマス草葺き宣言

美しい自然は人に感動を呼び、懐かしい風景は人に安らぎや落ち着きを与えます。そういうものが失われていくことが、今は時代のなりゆきですまされがちですが、そんなに速くない将来、人にとって大切なものであったと気づく日が来るでしょう。

とりわけ、草葺き屋根の民家は里地の自然にとけ込んで、懐かしい日本の原風景を演出し、そこには生物多様性に富んだ水田農村風景が存在しました。

昔から地域に残る草葺き屋根の民家は、美しい農村風景を演出するだけでなく、自然と共生する知恵や文化、農村の歴史文化、生活文化を伝える民俗文化財であり、地域遺産として大切にすべき環境ランドマークでもあります。

かつて、農村の川や野原、山は、美しく管理され、四季それぞれ、子供がいろんな遊びを楽しんでいました。ある意味で野山そのものが公園でありました。

池や小川、棚田があって、雑木林や山道のある林野には、そのような里山・里川の原風景が残されていました。

そんな里山の近くには、梅や梨の花が咲くのどかな畑の風景、古い大きな民家、苔むした寺、神社、鎮守の杜、老木を見ることができ、そして、何よりもその景色の中心には愛すべき草葺き屋根の風景がありました。

私たちは、自然の恵みであるバイオマス資源を大切に活用し、草葺き屋根の風景を心に、人々の幸福と世界平和を願い、地球環境時代に求められる生活スタイルや、美しい自然と風景を大切にする生き方、ライフワークを実践していきます。

以上、宣言します。
2003年3月15日
草葺きサミット準備会

（2）平成15年度前期の活動内容

1）他地域の視察見学

草葺き民家のシンポジウムやフォーラムは、それなりにインパクトがあり、継続させているが、一日や二日のイベントでなく、また、特定の地域に限定せず、多くの人に参加でき、「美しい日本の自然と風景の保全と再生」を目的としたグラウンドワーク活動により多くの人に参加できるような企画や催しも必要であるということで、全国の草葺き民家やその周辺環境を視察し、その土地の人と意見交換・情報交流を行うワークショップイベントとして、「草葺きエコツアー（日本草葺き紀行）」を開催している。

現在までに「草葺き源流紀行」などとして、

岡山県阿波村（4月21日）での「加茂郷阿波・草葺き源流紀行」を最初に

岡山県総社市（4月29日）

岐阜県白川郷（5月10日）・富山県五箇山（5月11日）、

岡山県加茂町（5月25日）、

鳥取県智頭町（6月14日）、

京都府美山町（6月21、22日）、

真庭郡川上村・八束村の茅場（6月29日）、

四国村（四国民家を移築した屋外民家博物館）（7月19日）、

岡山県吉永町（9月13日）、

真庭郡湯原町・川上村（10月5日）、

岡山後樂園（延養邸など）（11月22日）、

岡山県西粟倉村・東粟倉村（11月23日）などで視察会・見学会を開催し、草葺き民家

や茅場を訪ねている。今後も県内だけでなく日本各地の草葺き風景を訪ね、その地に暮らす「草葺きファン」の方と文化交流を行い、「草葺き友の会」の会員拡大をはかって行きたいと考えている。

2) 他地域団体との交流

「茅葺き民家」や「茅場」を保存しようという活動は、全国各地で展開されており、これら他地域で活動中の団体の交流をはかろうと、平成15年5月に岐阜県白川郷で開催された茅葺きシンポジウム(全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会主催)や6月の鳥取県八東町での現地検討会(とっとり民家維持再生計画研究会主催)・神戸での茅葺きサロン(カヤテックコミュニティなどの主催)、7月の四国民家フォーラム(日本民家再生リサイクル協会主催)、10月の「第6回全国草原サミット・シンポジウムin霧ヶ峰」に参加し、日本民家再生リサイクル協会、日本ナショナルトラスト、茅葺きネットワーク(全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会)、カヤテックコミュニティ、とっとり民家維持再生計画研究会、茨城茅舎の会、都市農山漁村交流活性化機構などとの情報交流や連携を進めることができた。

3) 茅葺き職人との交流

岡山県加茂町および鳥取県智頭町での草葺き民家視察会(草葺き源流紀行)や蒜山高原での茅場の見学会(6月29日開催)の開催にあたり、山本進氏や小林光男氏など地元岡山県内の茅葺き職人に参加を求め、交流をはかっている。

とくに、山本進氏とは、蒜山高原の茅場について、その管理のあり方など、技術的な意見を踏まえ、今後の資源活用について意見交流を深めることができた。

また、美山町や神戸市などで若手茅葺き職人と活躍する塩澤実、神戸で茅刈りボランティア活動を続ける守隆氏などとは、メーリングリストなどで情報交流を行うほか、草葺きシンポジウムや神戸市において意見交流をはかっている。

4) 交流フォーラムの開催

「茅葺き民家」や「茅場」について活動中の団体の交流をはかろうという目的で、平成15年9月14日(日)に岡山県吉永町八塔寺ふるさと村の高顕寺(草葺き)において「吉永町・地域づくり草葺きフォーラム」を開催している。

このフォーラムは岡山県、鳥取県、島根県、広島県、兵庫県、京都府、滋賀県あたりの草葺き屋根の大好き人間や活動団体を招いての活動報告会型および提案型の交流イベントとして開催している。

また、フォーラムの開催にあわせ、9月13、14日と吉永町に残る草葺き民家や茅場を訪ねる視察見学会を開催している。

報告者など：金谷啓紀氏(CDMJ理事)、木谷清人氏(とっとり民家維持再生計画研究会代表)、浅津昭造氏(NPO法人日本民家再生リサイクル協会)、上野美帆氏(都市農山漁村交流活性化機構)、上村信行氏(広島大学・大学院工学研究科)、宮本繁雄氏(福岡県甘木市、NPO法人日本民家再生リサイクル協会)ほか

(3) 平成15年度後期の活動内容

財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団より委託された「岡山県真庭地区における草葺き民家の保存再生および草葺き民家を地域資源として活用した村づくり・まちづくりの展開に向けた調査」などを受けて、平成15年度後期に以下の内容の活動を実施している。

1) シンポジウムの開催

草葺きサミット準備会の中心団体として、平成15年10月以降、以下のシンポジウムを開催している。

草葺きシンポジウムin真庭

開催日：10月3日(金)、4日(土)、5日(日) (会場：勝山町民センターおよび新庄村ふれあいセンター)

このシンポジウムでは、真庭郡および全国における草葺き民家の現状と保全活用について、景観保全(日本の美の継承)、グリーンツーリズム、農村コミュニティビジネスの視点からも検証しながら、その保存活用について意見交換を行い、郡内の草葺き民家や里山草原を巡る遺産ツアーも実施している。

講師・パネリストなど：山崎光博教授(明治大学農学部)、浜美枝氏(女優、農政ジャーナリスト)、大西珠枝氏(岡山県副知事)、川村雅人氏(三菱総研地域政策センター長)、高橋佳孝氏(近畿中国四国農業研究センター)、米山淳一氏(財団法人日本ナショナルトラスト事務局長)、守隆氏(カヤテックコミュニティ)、星原達雄氏(真庭森林組合専務理事)、中野文平氏(美山町北村茅ぶきの里保存会会長)、山本進氏(茅葺き職人)、細野良三氏(NPO法人日本民家再生リサイクル協会代表理事)、辻均一郎氏(御前酒蔵元(株)本店代表取締役)、澤本晴視氏(真庭遺産研究会会長)、徳永巧氏(真庭遺産研究会事務局長)ほか

草葺きシンポジウムin岡山市

開催日：11月21日(金)、22日(土)、23日(日) (会場：岡山後楽園および岡山県生涯学習センター)

このシンポジウムでは、岡山県およびその周辺地域における草葺き民家の現状と保全活動の報告とあわせ、世界の草葺き民家や次世代草葺き建築を紹介するとともに、環境と住まいの環境文化、自然共生型住宅について語りながら、都市農村交流の中で草葺き民家の保存活用を考えている。また、岡山県東北部の草葺き民家を巡る視察会も実施している。

講師・パネリストなど：安藤邦廣教授(筑波大学芸術学系)、萩原誠司氏(岡山市長)、千葉喬三教授(岡山大学副学長)、先崎武氏(環境がたて-全国連合会理事長)、萩野芳彦教授(大阪府立大学農学部)、黒坂清子氏(茨城県茅舎の会)、プライアン・ウィリアムス氏(風景画家)、黒石いずみ氏(青山学院女子短期大学助教授)、道上正寿氏(西粟倉村長)、中野誠氏(茅葺き職人)、塩澤実氏(茅葺き職人)、金谷啓紀氏(NPO法人CDMジャパン理事)、田中修氏(株)邑計画事務所)、高田正己氏(BOZZ建築工房主宰)、武田賢治氏(株)エスポ建築研究所代表取締役)、金平坦氏(草葺き民家オーナーズクラブ会長)、高垣門土氏(陶芸作家、NPO法人日本民家再生リサイクル協会)、岡嶋邦義氏(草葺き民家オーナーズクラブ)、徳永巧氏(真庭遺産研究会事務局長)ほか

シックハウスを考える民家のシンポジウム

開催日：2004年2月15日(日) (会場：久世エスパランド)

このシンポジウムでは、シックハウスをテーマに「住まいの環境文化」について語るシンポジウムとして開催し、シックハウスや民家についての講演の後、4つの分科会に分かれてシックハウスについて意見交換する中で、民家のあり方、住まい方について認識を高めあった。

講師：上原裕之氏（NPO法人シックハウスを考える会代表）、渡辺一正教授（市民文化財ネットワーク鳥取理事長、鳥取環境大学教授）

コーディネーター・パネリスト：黒田武儀氏（NPO法人日本民家再生リサイクル協会副代表）、山名千代氏（女性建築士の会ACT 代表）、山下豊氏（山下木材㈱ 代表取締役）、広田正己氏（左官職人）、金平坦氏（草葺き民家オーナーズクラブ会長）ほか

美しい日本の風景を語るシンポジウム

開催日：2004年3月20日(土)、21日(日)（会場：久世エスパランド）

このシンポジウムでは、草葺き民家をはじめ文化財建築物やその景観保全について活動する団体が活動報告を行い、分科会やパネルディスカッションで意見交換を行った。

また、草葺き民家や真庭遺産を通じた活動報告、景観緑3法の説明会などを行った後、筑紫哲也氏の「スローライフと美しい風景の保全」について講演の後、「美しい農村原風景の保全再生」、そして、「美しき日本再生」について、新しい地域ノウハウやシステムづくりについて意見交換を行った。

あわせて、久世の市街地に残る古民家見学会や「こども鑑絵教室」を開催し、3月20日、21日の両日、旧遷喬尋常小学校（国指定重要文化財）全体を展示館として、古民家景観や日本の原風景などの室展示を行っている。

講師：筑紫哲也氏（TBSニュース23キャスター）、日塔和彦先生（文化建造物財保存技術協会）。

パネリスト・報告者など：松田一郎氏（国土交通省大臣官房審議官「都市・地域整備局」）、川村雅人氏（三菱総研地域政策センター長）、澤田廉路氏（財）とっとり政策総合研究センター）、中谷功氏（NPO法人日本民家再生リサイクル協会）、中野邦治氏（有）かやぶきの里社長）、木谷清人氏（とっとり民家維持再生計画研究会代表）、田村達也氏（市民文化財ネットワーク鳥取副理事長）、岩本壮八氏（勝山町まちづくり振興課）、藤原やすえ氏（NPO法人あとリエはらっぱ）、岡村慶子氏（青森県環境生活部文化・スポーツ振興課）、石本勝典氏（沼隈町民家を大切にする会）、高原一朗氏（岡山文化財建築物ネットワーク代表）、大谷裕子氏（真庭遺産研究会）、清水喜代志氏（国土交通省都市計画課）、高橋佳孝氏（近畿中国四国農業研究センター）、加納容子氏（町並み保存事業を応援する会）、徳永巧氏（真庭遺産研究会事務局長）ほか。

2）草葺き民家の調査検証

役場や地域住民へのヒアリングにより、草葺き屋根の分布状況やその所有者、調査協力者からの情報を集めている。

町村ごとに幹線道および町村道を移動し、草葺き屋根の分布状況やその所有者、管理状態（痛み具体）、種別（民家、納屋など）、大きさ（規模）、利用状況（住居、空家、物置、交流施設など）について外観から調査するとともに、写真撮影を行っている。

草葺き民家については、真庭地域内に500棟以上残存しているが、そのほとんどは金属を被せたものである。

ここでは、「金属を被せた草葺き民家」と「金属を被せていない昔ながらの草葺き民家」に区分し、調査を進めたが、「金属を被せた草葺き民家」については、数が多数な上に、広い地域に分散して分布していることから、比較的集中する地区の存在について調査し、その周辺の自然や景観、風景、土地利用、観光資源についても調査を行っている。

現在、「金属を被せた草葺き民家」について、比較的保存状態の民家やロケーション（周囲の環境）のよい民家をピックアップし、所有者を訪問し、聞き取り調査を実施するとともに、草葺き民家台帳を作成中である。

3) 茅場の調査検証

真庭遺産研究会では、平成15年9月より真庭森林組合と連携し、「茅場（茅刈り場となるススキ草原）」の分布調査を進めている。

町村ごとに、茅場となる草原（ススキ群落）の分布状況やその面積、管理状態、植生（相観）について調査するとともに、写真撮影を行っている。

美しい草原風景が魅力の中国山地であるが、草葺き屋根が姿を消していくのと連動するかのよう、かつての草刈り場の風景は次第に見られなくなっていき、全国に広く見られた里山草原は山村の限られた場所にしか残されていない。

草葺き屋根の民家や建物を考える場合、その材料となる茅を生産する環境についても考察する必要がある。かつて、中国山地の農村では、広い面積で茅場と呼ばれるススキ草原が分布しており、のどかで牧歌的な里山風景が広がっていた。

そこには、秋の七草をはじめ、美しい山野草が多く見られたほか、草原棲の昆虫や野鳥、小動物が生息しており、地域固有の生態系がみられた。

現在、里山ブームであり、落葉広葉樹からなる雑木林が人気で、棚田や雑木林が里山の代表的景観とされているが、草刈り場として利用されていたススキ草原（茅場）は忘れてはならない里山の環境要素である。

この美しい草原風景は、茅の需要が少なくなるとともに、多くの農山村でスギやヒノキの植林にとって変わられ、今は蒜山地域や新庄村、上斎原村、阿波村などの一部の山村に残るのみとなったが、その残された茅場も人の手が入らなくなり荒廃しつつある。

4) グリーンツーリズムの調査研究

これら真庭地域の環境を生かし、草葺き民家の保存活用を考える上で、グリーンツーリズムが有効と考えた。現在、自然派指向、ふるさと指向の人が増え、豊かな緑や農山村のよさを求めて、多くの都市生活者が農山村に遊びに来ており、行政も中山間地域の活性化を目的に都市農村交流を促進しようとしている。

そのためには、地域に暮らす人が連携し、グリーンツーリズムを生かした農村ビジネスを考えることも必要と考え、「グリーンツーリズムでの草葺き民家の活用」をテーマに、平成15年10月3、4日と「草葺きシンポジウムin真庭」を開催している。

そして、グリーンツーリズムについての調査研究を行う中、地域ノウハウの蓄積や情報の共有をはかり活動を効率的に推進するための組織づくりを進めている。

なかでも、茅や間伐材・古材（古民家部材）を資源として活用し、「草葺き屋根の風景」を増やして行きたいと考えている。

それには、古民家の修復活用だけでなく、「草葺き屋根のセカンドハウス」など新しいタイプ草葺き屋根の家についても検討している。

今後は、・・・

- 地域資源の掘り起こし評価・紹介、
- 古民家調査・データベース化、
- 次世代の草葺き建築物の研究開発、
- 地域ガイドシステムづくり、
- 古民家トラストバンクの暫定的実施、
- 美しい農村風景づくり手法の調査研究、
- 農村文化伝承行事の開催、
- 農村山村交流促進、
- 農家と消費者の交流促進

・・・などについて取り組む計画である。

以上については、コミュニティビジネスや農村（ふるさと）ビジネスに結びつくよう、住民や団体が連携連絡を取りあって進めることも必要である。

従来なら、行政が窓口になって組織化を進めるとというのが普通であつが、真庭遺産研究会では、農村ビジネスという側面に重きをおいて、グリーンツーリズム事業協同組合とNPO的都市農村交流研究会による二重構造の組織づくりを検討している。

これについて少し説明すると、都市農村交流や農村ビジネスに関心をもつ個人や農家、事業者（主にサービス業種）が「異業種交流的」が少数集まり、機動力の高い事業協同組合を複数組織し、事業活動を展開させるのと併行して、真庭地域を対象に都市農村交流や農村環境保全を目的としたNPO的研究会を組織することによって、情報の共有化などの連携をはかるという形態を考えている。

別荘は、その性格から、つかわれにくい時間の方が圧倒的に多いことから、オーナーとなる利用者が使用しない時は、民宿として利用するというものである。

草葺き屋根なので、不特定多数の人の宿泊に利用できないということであれば、共同オーナー性あるいは会員利用を考える。

「草葺きの家」は特定の場所に集中させる必要はなく、広域的なグリーンツーリズム構想の中で、町村の境界を越えて分散させることも検討する。

また、「みんなの草葺き宿」は最初からたくさん建設する必要はない。オーナーや会員を募集し、グラウンドワーク活動の中でシンボリックに第1号棟を建て、多くの人利用する中で、様子をみながら第2号棟、第4号棟を建てていく。このような協働作業で「草葺きの家」を増やし、数年後には10棟以上の「草葺きの家」の建設を検討している。

そして、平成15年11月21、21日と「草葺きシンポジウムinおかやま」を開催し、「海外の草葺き建築物」や「草葺き別荘」、「都市農村交流による草葺き民家の保存活用」について情報交流するとともに、伝統的草葺き民家の保存活用をはじめ、グラウンドワーク活動による草葺き公園施設の整備、「次世代の草葺き住宅」や「草葺き公共施設」についての調査研究を進めている。

グラウンドワーク活動による草葺き公園施設としては、耕作放棄水田や低利用公共緑地でのピオトープ園地づくりであるが、草葺き屋根の休憩小屋やゲート門、管理棟、トイレ棟、水車小屋（水車発電）などで固定施設で風景的な演出をはかるほか、草葺き基地づくりや草葺き屋台村農村市、仮設草葺き庵村での農村文化フォーラムの開催などの体験イベント、交流イベントでの空間利用をはかることを検討している。

「草葺き公共施設」としては、自然館やビジターセンター、案内所、地域博物館、「田舎暮らし交流館」、体験学習施設、環境学習施設、特産物の販売所、アンテナショップなどが現実的であるが、もっと身近にバス停、ゴミステーション、農機具庫、青空市場、料金所、トイレ棟、農村広場の休憩所なども風景的には検討の余地があるとされる。

話しをグリーンツーリズムに戻すと、「草葺きの家」の管理運営とそれ以外の農村民泊施設との関係が気になるところであるが、「草葺きの家」の家は、セカンドハウスとして個人で所有管理するもの、NPOや集落などで共同オーナー性で管理するものが考えられ、会員性の農村民泊施設としての利用が考えられるが、グラウンドワーク活動により時間をかけて増やすこととし、並行して、空き家（古民家）や農家の「離れ」を改築した農家民宿を考えている。

さらに、真庭遺産研究会では、庄屋屋敷をはじめ古民家の風景の保全や建物そのものを保存すべく活動を展開しているが、古民家の保存を推進する上で、その活用を考えることも重要で、民家としてトラスト活用や農村民泊施設としての利用も検討している。

その場合、課題となるのは、「田舎暮らし」やグリーンツーリズムなどを推進する上での地域の受け入れ体制である。

真庭郡の場合、良好な自然環境や歴史的環境は存在するが、安価に宿泊滞在できる施設は不足

している。その理由は様々考えられるが、経営ノウハウや意欲の問題も大きいと思われることから、勉強会や交流会、視察会などを重ねる中で、自分たちにみあったノウハウを考える機会として研修旅行を開催したいと考えている。

このような調査研究活動を通じて、過疎高齢化が進行し、農地や山林の荒廃が問題化する中山間域において、住民・NPO等と事業者（木材関連、造園土木関連）、学識経験者（農村経営、建築）、都市生活者などが協働して地域素材や資源を生かす実践モデルが生まれると同時に、「草葺き文化・技術」、「グリーンツーリズム」についての地域ノウハウが生まれると考えられる。

そして、新しい「都市農村交流」や「田舎暮らし」をスタイルがつけられるとともに、新しいビジネスモデルや産業、雇用が生まれ、真庭地域全体の経済振興と活性化がはかれることを期待される。

草葺きの郷づくりによるグリーンツーリズムの推進は、「田舎暮らし」や「都市農村交流」といった文化性に頼りただけの地域の活性化を目指しているのではない。

「草葺き屋根」やグリーンツーリズムについて勉強し、新しいアイデアや取り組みを進める中で、中山間地ならではの、真庭地域ならではの、地域ノウハウが生まれ、ひいては新しいビジネスモデルを開拓することにも意義を見出している。

そのためには、多くの人や団体が関係し、情報を共有する中で、新しいものを作り出す仕組みが必要であることから、「草葺き屋根」や地域素材、建築、環境、グリーンツーリズムに関心をもつ個人・団体が参加する組織（事業組合、農業法人）を組織する必要があるとされた。

5) 事業化の検証

現在、真庭郡内には金属板で被われながらも、500～600棟の茅葺き家屋が残存している。その中には、文化財クラスの立派な茅葺き民家も存在しているが、空家予備軍や崩壊寸前の廃屋も多く見られる。この傾向は、真庭地域だけでなく、中四国、九州、近畿地方の山間部に広くみられることがわかっている。

廃屋は、解体して処分するとなると多額の費用がかかるため、当分の間は物置などとして利用されると考えられるが、急速に痛みが進行し、風雨にさらされるうちに、古材（建築部材）として活用できなくなる上に、景観や地域イメージを悪化させることとなる。

美しく管理された草葺き民家は、昔懐かしい農村原風景を演出するランドマークであり、地域の資源になることが多いが、廃屋と化した民家は地域景観を阻害することもある。

新庄宿に見る草葺き民家もそうなるかもしれない。

一方で、スローライフや田舎暮らし、自然との共生などへの憧れからか、古民家のリニューアルや移築再生などの経済活動も見られ、市場（マーケット）的にはかなりの潜在需要があることがわかっている。

これら、市場（マーケット）を開拓し、新しい経済需要を発生させることで、失われゆく草葺き民家が保存再生されていくことも考えられる。

これについては、資金面をはじめ、個々の個人や事業者では難しい問題が多くあるばかりが、本来、現地に残し、地域資源として活用すべき家屋さえ、業者の営利活動の中で失われることもある。

そこで、古民家の保存活用や再生リサイクル、都市農村交流、田舎暮らし、農村風景の保全に関心をもつ個人や事業者が「異業種交流的」に連携し、草葺き民家保存再生の事業協同組合などの立上げを準備している。

あわせて、市場経済のもとに事業活動を展開させることと併行して、情報を共有しながら、新しい市場（マーケット）を開拓し、美しい国土景観の保全形成や環境問題を考える全国会議の開催を検討している。

6) ホームページの開設

平成16年2月に草葺きサミットや真庭遺産研究会の活動および「草葺き民家」を紹介するホームページを作成し、仮オープンさせている。

現在、「金属を被せた草葺き民家」の調査とあわせて、周辺域の環境状況や歴史的資源、風景、生活文化についても調査を行い、草葺き民家のトラスト的な保存活用を促進するネットワークの構築をはかる目的で、草葺き民家についての情報や里地の環境情報のデータベース化およびデジタルアーカイブの作成を行っている。

4. 活動の成果

(1) 平成14年度までの主な活動成果

1) 地域資源情報の蓄積

数年間にわたる調査・掘り起こし活動により、真庭遺産研究会では、真庭に残る美しい景観や自然、歴史的遺産について多くの情報や人的ネットワークとともに、美しい写真映像を収蔵することができた。

2) 地域住民の意識の高揚

視察会や見学会に加えて、平成13年3月からの地方新聞連載による「まにわ遺産（真庭に残る美しい景観や文化財）」の紹介の効果からか、真庭遺産は広く真庭地域の住民に浸透しており、自然や景観、風景を大切にしたいという意識は強まっていることを実感することができた。

3) 活動のための組織形成

真庭遺産研究会では、草葺きサミット（草葺き屋根の全国シンポジウム）を企画開催するにあたり、研究会を中心に、住民・NPO等、大学教授、建築士、地元学識経験者、郷土史家、地域づくりプランナー、環境カウンセラー、役場関係者などに呼びかけ、「草葺きサミット準備会」を組織しているが、平成15年3月開催の「グラウンドワーク草葺きフォーラム」の開催を契機に、当初の草葺きサミット準備会メンバーのほか、多くの人々が係わって、草葺きサミットの活動に参加するようになり、「草葺き友の会」や「草葺き民家オーナーズクラブ」など「茅葺き民家の保存」や「草葺き文化の継承」、「美しい日本の自然と風景の保全再生」に向けて新しい連携ネットワークが形成されるようになった。

「友の会」では、さまざまな企画を考え、広く一般の人たちの参加を呼びかけたいということで、「草葺きエコツアー（日本草葺き紀行）」を開催しておいる。県内だけでなく、日本各地の草葺き風景を訪ね、その地に暮らす「草葺きファン」の方と意見交流を行っている。

(2) 平成15年度前期の主な活動成果

1) 草葺き民家に係る情報蓄積

岡山県阿波村に残る草葺き民家や自然を訪ねる「加茂郷阿波・草葺き源流紀行」を開催したのをかわきりに、5月に岡山県加茂町、6月に鳥取県智頭町、京都府美山町、真庭郡川上村・八束村、9月に岡山県吉永町、10月に真庭郡湯原町・川上村、11月に岡山県西粟倉村・東粟倉村などで草葺き民家の視察会を開催することで、草葺き民家や茅場を訪ねなど、岡山県や中国地方に残る多くの草葺き民家を訪ねることができた。

また、平成15年5月に岐阜県白川郷で開催された茅葺きシンポジウムや7月に開催された四国民家フォーラムに参加し、草葺き民家や文化について多くの情報を得ることができた。

そして、「草葺き友の会」の名前で岡山県を中心に草葺き建築物を見学する視察ツアー（草葺き紀行）を開催したり、茅葺き職人、茅葺き民家の所有者、古民家の保存再生活動を展開する団体などと情報交流を重ねる中、草葺き民家に係る多くの情報を蓄積することができたほか、多くの草葺き民家をフィルムに納めることができた。

2) 活動のための連携拡大

草葺き民家の保存や活用を考える場合、様々の分野の人や団体との連携が大切と考えている。システムとして草葺き民家の保存活用を考える場合、茅葺き職人や住まい手、建築関係者のほか、多くの分野の人の関与が必要となる。

真庭遺産研究会では、平成13年春より、出雲街道の宿場町（新庄宿）に残る草葺き屋根の民家の保存活動を展開してきた。

活動を展開する中で、草葺き屋根に関心の高い個人や団体を招いて草葺きサミット（草葺き屋根のシンポジウム）を開催してみようという話しになり、自分達はもっと草葺き文化について勉強する必要があるということで、草葺きサミット準備会を立ち上げ、日本民家再生リサイクル協会や茅葺きネットワークほか、多くの団体の協力を得ながら活動を進めている。ここでは、草葺きサミットを運営していく中で、立ち上がった会やネットワークや協力してもらった組織を紹介していく。

3) 交流ネットワークの形成

草葺き民家は多くの場合は、古民家であり、町並み保存や古民家再生などの活動団体の思いの深い民家である。

また、ふるさとの風景の代表となる草葺き民家は、田舎暮らしに思いをよせる都市生活者にとって、憧れであるとともに、自然愛好家や農村文化の振興、循環型社会の構築に向けて活動する個人・団体にとっても気になる存在である。

草葺き屋根の家は、住居であり、景観資源であることが多い、そして、その材料となる「茅」は、工場でなく、山野や湿地帯など自然域で生産されることから、植生や生態系の分野からのアプローチも必要である。

そして、農村景観を演出する草葺き屋根は、画家や写真家など、「日本の美」を求めて活動する文化人にとっても大切な対象であることから、大自然の眺望や農村景観など、自然景観や原風景を考える組織・団体との連携も深めて行きたい。

(3) 平成15年度後期の取り組みによる成果

1) 地域住民の新しい組織形成

これまでの真庭遺産研究会の活動に加え、平成15年3月の「グラウンドワーク草葺きフォーラム」、10月の「草葺きシンポジウムin真庭」、平成16年2月の「シックハウスを考える民家のシンポジウム」、3月の「美しい日本の風景を語るシンポジウム」の開催およびその広報を通じて、真庭郡内に「美しいふるさと真庭の自然や景観、風景を大切にしよう」という動きと、3月15日に丸山美砂子氏（八束村）を委員長とする新しい組織（まにわ美しい風景研究会）をつくることのできた。

加えて、現在、真庭地域内で活動する地元企業・事業者呼びかけて、真庭地域に残る美しい自然や景観、風景を紹介するホームページを作成にとりかかっており、これに参加する企業・事業所で「草葺き文化」や「草葺き技術」、「茅」を活用し、新しい事業を起こそうとする異業種交流の動きが見えてはじめている。

以下、まにわ美しい風景研究会（代表丸山美砂子氏）について紹介する。

目的および活動内容

目的については趣意書の内容とする。活動内容は以下とする。

真庭地域に残る美しい自然や風景についての情報発信・情報交流・啓発活動

美しい自然や風景を大切にするための調査研究活動

美しい自然や風景を保全再生する真庭地域での実践活動（グラウンドワーク活動）

美しい日本の自然や風景を大切にするための他地域との交流活動

その他、日本および真庭の美しい自然と風景を大切にすることに資する活動

組織イメージ

“ゆるやかな情報交流組織”からはじめる

真庭地域に暮らす人や活動する企業・各種団体、そして真庭を“心のふるさと”とする多くの人々が参加できる“ゆるやかな情報交流組織”からはじめ、組織および関係者について、少しずつ専門能力や政策提案能力、事業化能力を高めていく。

“事業化に取り組む能力を有する組織”を目指す

イギリスのグラウンドワーク・トラストのように、住民・企業・行政が連携して（パートナーシップをとりながら）、「風景づくり」や「景観保全と形成」、「自然環境の保全再生」についての“事業化に取り組む能力を有する組織”を目指す。

組織運営

“準備会的な組織運営”を進める

この会は、これから本格的に組織づくりを行うもので、真庭地域への情報周知も十分でないことから、当分の間は世話人（町村単位）および代表者（委員長）、事務局による“準備会的な組織運営”を進める。

“タウンミーティング的”な地域勉強会を開催する。

合併によって統合されるとしても真庭地域は広く、地域の自然や風景について、合併前の町村単位でも十分な情報発信や情報共有ができていないことから、現在の町村単位で講師や報告者を出し合って、“タウンミーティング的”な地域勉強会を開催することで、自然や風景（景観）についての勉強会を開催し、風景（景観）についての現状把握や情報発信・情報交流を行う。

“分科会的”なネットワークづくりを進める

真庭地域には、自然環境や風景・景観について様々な知識や能力を有する個人・団体が多く存在する。これら個人・団体は、環境や自然保護ばかりでなく観光、教育、行政、公共事業、農

林業、文化芸術など様々な分野に属していることから、これら個人・団体の意向を聞きながら、ゆるやかな連携がとれるよう“分科会的”なネットワークづくりを進める。

2) 草葺き民家の現状把握

真庭遺産研究会では、現地調査のほか、役場や地域住民へのヒアリングにより、草葺き屋根の分布状況やその所有者、調査協力者からの情報を集めている。

ここでは、「金属を被せた草葺き民家」と「金属を被せていない昔ながらの草葺き民家」に区分し、調査を進めたが、「金属を被せた草葺き民家」については、数が多数な上に、広い地域に分散して分布していることから、比較的集中する地区の存在について調査し、その周辺の自然や景観、風景、土地利用、観光資源についても調査を行っている。

新庄村

草葺きサミットの活動の原点である「新庄宿の草葺き民家」は、現在、空家（あるいは廃屋）状態で放置されている。

人口1,000人あまりの新庄村では、「新庄宿の草葺き民家」をはじめ、金属板に覆われたものを含めると「草葺きの家屋」や「草葺きのお堂」が60棟以上残されている。この中に金属板に覆われず昔ながらの草葺き民家の景観を残すもので、住宅として利用されているものは存在しないが、高下地区のように11軒の草葺き民家が集落道と小川に沿って立ち並び、密集する区域もみられた。

美甘村

人口1,700人あまりの美甘村では、金属板に覆われたものを含めると「草葺きの家屋」や「草葺きのお堂」が80棟以上残されている。この中に金属板に覆われず昔ながらの草葺き民家の景観を残すもので、住宅として利用されているものは1軒で、既に老朽化が進行しているが、矢倉地区のように中国山地の山並みを望む美しい山里風景の中に7軒の草葺き民家が残る区域もみられた。

川上村

大山隠岐国立公園に含まれる川上村は、年間200万人を超える行楽客が訪れている。また、県下屈指の豪雪地帯であり、村内には火入れによって茅場が多く残されており、各草葺き民家は、社田の池田邸に代表されるよい、大きくて立派な張り構造となっている。

人口2,400人あまりの川上村では、金属板に覆われたものを含めると「草葺きの家屋」や「草葺きのお堂」が110棟以上残されている。この中に金属板に覆われず昔ながらの草葺き民家の景観を残すもので、住宅として利用されているものは1軒で老朽化し、物置状態になっているが、黒岩地区や間谷のように20軒を超える草葺き民家が連続する区域もみられた。ここからは蒜山三座など眺望が良好で、中には農家民泊の施設として利用されていたものも見られた。

八束村

蒜山三座（大山隠岐国立公園）の山麓に広がる八束村では、旭川の河畔を中心に山沿い付近に大きな草葺き民家が数多く残されているが、空家となっているものもや物置として利用されているものも多い。

人口2,500人足らずの八束村では、金属板に覆われたものを含めると「草葺きの家屋」や「草葺きのお堂」が100棟以上残されている。この中に金属板に覆われず昔ながらの草葺き民家の景観を残すもので、住宅として利用されているものは1軒で、老朽化が著しく進行しているが、金属板に覆われた家屋の多くは立派な張り構造をもち、下井川地区のように7軒の草葺き民家が密集する区域もみられた。

中和村

静かな山里風景が広がる人口800人あまりの中和村では、山裾を中心に草葺き民家が残り、周囲には茅場となるススキ草原や湿地帯が広がっている。

中和村では、金属板に覆われたものを含めると「草葺きの家屋」や「草葺きのお堂」が40棟以上残されている。この中に金属板に覆われず昔ながら草葺き民家の景観を残すもので、住宅として利用されているものは存在しないが、下和川の清流の畔に真加子地区のように6軒の草葺き民家が密集する区域もみられた。

湯原町

中国山地の山懐に抱かれた湯原町では、山間の集落では多くの民家が草葺き屋根であり、立石の西田邸のように巨大な大屋根を有する屋敷も見られる。

人口3,400人あまりの湯原町では、金属板に覆われたものを含めると「草葺きの家屋」や「草葺きのお堂」が190棟以上残されている。この中に金属板に覆われず昔ながら草葺き民家の景観を残すもので、住宅として利用されているものは1軒でよく管理されている。小茅地区のように20軒を超える草葺き民家が集まる区域もみられるほか、杉成地区のように9軒の草葺き民家が谷川沿いに寄り添うように密集する区域もみられた。

勝山町

木材の集積地である勝山町には、その豊かな木材を生かし、古くから残る大きな屋敷が多くみられる。草葺き民家は、町の中心部ではほとんどみられないが、農村域を中心に若代地区の井原邸や岡地区の白石邸のように立派な草葺き民家も多く残されている。

人口9,300人あまりの勝山町では、金属板に覆われたものを含めると「草葺きの家屋」や「草葺きのお堂」が70棟以上残されている。この中に金属板に覆われず昔ながら草葺き民家の景観を残すもので、住宅として利用されているものは白石邸などの3軒で、よく管理されているものと老朽化しているものの両方がみられる。富山地区のような20軒を超える草葺き民家が静かな山里に広く分布する区域もみられる。

久世町

旭川の河畔に開けた久世町は、真庭地域の中心として都市化・市街化が進行し、草葺き民家は市街地周辺ではごくわずかしか残されていない。

人口11,000人を超える久世町では、金属板に覆われたものを含めると「草葺きの家屋」や「草葺きのお堂」が30棟以上残されている。この中に金属板に覆われず昔ながら草葺き民家の景観を残すもので、住宅として利用されているものは存在しない。

また、旭川の河畔平野には、草葺き民家は少ないが、余野地区のように20軒を超える草葺き民家が谷沿いの下部斜面に広く散在する区域もみられる。

落合町

南に吉備高原に続く落合町では、久世町・勝山町と同様に、草葺き民家は市街地周辺ではごくわずかしか残されていない。

人口16,000人を超える落合町では、金属板に覆われたものを含めると「草葺きの家屋」や「草葺きのお堂」が60棟以上残されている。この中に金属板に覆われず昔ながら草葺き民家の景観を残すもので、住宅として利用されているものは3軒で、よく管理されているものと老朽化しているものの両方がみられる。多く見られる区域は、標高300mを超える丘陵地の尾根部（隆起平原上部）で里山の環境の中、草葺き民家が散在している。

北房町

備中川の平野部に広く民家が分布する北房町では、カルスト台地が広がる高原状の地形もみられる草葺き民家が多く散在している。

人口6,300人あまりの北房町では、金属板に覆われたものを含めると「草葺きの家屋」や「草葺きのお堂」が70棟以上残されている。この中に金属板に覆われず昔ながら草葺き民家の景観を残すもので、住宅として利用されているものは2軒程度で老朽化している。

3) 茅場の資源性確認

草葺き屋根の民家や建物を考える場合、その材料となる茅を生産する環境についても考察する必要がある。

かつて中国山地の農村では、広い面積で茅場と呼ばれるススキ草原が分布しており、のどかで牧歌的な里山風景が広がっていた。また、西日本の農山村の多くは、林縁地帯に栗や柿などの果樹や植えたり、畑や牧野として利用したり、草刈場として利用したりして、そこには明るく見晴らしのよい里山の環境が存在していた。

そこには、秋の七草をはじめ、美しい山野草が多く見られたほか、草原棲の昆虫や野鳥、小動物が生息しており、地域固有の生態系がみられた。

美しく管理された林野の風景が農村の魅力の一つであるが、現在、農村のいたるところで植林地が民家のすぐ裏まで迫り、そこは暗く季節感に乏しい環境となっている。

真庭遺産研究会では、草葺き民家の所有者などと連携し、茅葺き民家の保存修復とあわせ、茅の供給地である草刈り山（里山草原）を美しく管理しながら（秋の七草プロジェクト）、林縁農地や水辺の自然復元をはかることで、ビオトープ・コリドーとなる「水と緑の回廊」を再生させるべく活動を進めている。

そして、注目しているのが、蒜山高原などの火山麓に広がる広大なススキ草原である。

蒜山地域や大山地域などに残る美しい草原風景の保全再生をはかりながら、茅（ススキ）や葎（ヨシ）、笹（ササ）、粗朶（ソダ）、間伐材、土など、農村域において再生産可能な自然系建材（環境資源）を安価安定的に供給する地域システムを考えている。

茅の供給地となりうる草原の分布状況や草原としての環境調査を実施し、草葺き民家再生につとめる民間団体や京都の美山町、岐阜県白川郷、吉永町などと連携して、茅銀行（バンク）ネットワークの設立をはかるとともに、荒廃が懸念される茅場について、グラウンドワーク・トラストの方式での茅刈りを行い、ストックヤードの確保、茅の流通ルート・販路の確立をはかっている。

4) グリーンツーリズム構想の策定

「新庄宿の草葺き民家の風景保存」からスタートした草葺きサミット関連の動きも「茅場（里山草原）の保全」、「草葺き技術の伝承や応用」、「次世代草葺き住宅」、「草葺き屋根（農村原風景）保全の社会システム」、「田舎暮らし、都市農村交流」などの議論を重ね、「草葺き紀行」の開催や関連シンポジウム、フォーラムへの参加などの活動を展開していくにつれ、「草葺き屋根の修復再生」は技術的にも経済的にも無理なくできるという確信を得ることができた。

「茅場の保全再生」や「草葺きネットワーク」の構築などにより、修復工事技術面、工費面での課題に対する回答が見えてくるに中、「保全再生の対象となる草葺き屋根はどこにある」という壁にぶつかった。

そんな中、全国的に見て岡山県は、茅葺き屋根の民家が多い地域とされていることを知るにあたり、「トタン（金属板）を被せた草葺き民家も保存修復の対象にすべし」という考えを強めた。実際、真庭地域には、風景的にも優れた草葺き屋根の民家も現存しているが、金属板を被せた建物にも素晴らしい草葺き民家がみられる。

トタン（金属板）を被せたものであれば、ほかにも素晴らしい草葺き民家は多くあります。そ

これは真庭は木材の産地であり、立派な建築文化があったからと考えられる。

中にはトタン（金属板）を剥がし、草葺き屋根を葺き替えるだけで、素晴らしい農村風景が蘇る環境にある民家も見られる。

加えて、真庭には、蒜山高原という広大な草原地帯が広がっており、多くの茅を生産する環境を見ることができる。

「美しい日本の自然と風景の保全再生」を考える上で、「田舎暮らし」や「都市と農村との交流」を促進することの意義は大きい。それは、つきつめていけば、情報の共有、「思い」の共有というところにぶつかるであろう。

ここでは、真庭郡中北部（新庄村、美甘村、川上村、八束村、中和村、湯原町、勝山町）において、「草葺き屋根」の新しいセカンドハウスの開発や、それを利用したグリーンツーリズム（農村滞在旅行）の推進について「協働」で調査研究し、全国に先がけた実践モデルや地域ノウハウ、ビジネスモデルをつくることで、「都市農村交流」や「田舎暮らし」を促進し、真庭地域全体の経済振興と活性化をはかることを目的とする。

「田舎暮らし」を促進する上で、また、「都市と農村との交流」を促進する上で、ヨーロッパにみるグリーンツーリズム的な余暇利用と宿泊滞在施設は必要である。

日本の農村には手が届くに安い宿（安価に利用できる宿泊滞在施設）は少ない。また、ドイツにみるような農村民宿や民泊施設が少ないのも現実である。

そしてもうひとつ、「田舎暮らし」を促進する上で、また、「都市と農村との交流」を促進する上で、生きた農村情報を入手あるいは提供できる仕組みが乏しいということであると考えられる。

「生きた農村情報」とは、「双方向の情報交流」や「生きた人による情報紹介」のことをいう。

田舎と言って象徴的にイメージされる日本の風景がある。それは水田を前にした草葺き屋根の民家である。では、何故、真庭で「草葺きの郷づくり」であるかと言えば、茅場となるススキ草原が広く分布し、草葺き屋根の材料となる茅（ススキ）が生活の場の近くで多く生産されるからである。そして、何より大きな理由は、多くの人たちが「草葺き屋根」に寄せている「ふるさとの自然と風景を大切にしたい」と思いは強く、その「思い」をかなえたいと活動している人たちが存在しているからである。

真庭遺産研究会が大切にしたいと考えているのは、日本の農村原風景のシンボルとも呼べる「ふるさとの自然の中に生きづく草葺き屋根の風景」であるが、それは現存する景観や建物に限定されない。草葺き屋根の伝統的技法であり、材料となる茅を供給する里山草原の環境も大切にしたいと考えている。

社会環境や生活様式が変化した今、風景としては憧れであっても、現実に草葺き屋根の民家を修復保存して、その中で「即、生活しろ、田舎暮らしを楽しめ」と言われても多くの人にとって難しい内容がある。

そこで、検討してみたものが民泊可能な草葺き屋根の別荘（みんなの草葺き宿）である。技術的な問題、価格的な問題、法的な問題は計画段階で検討するとして、現在はご利用について考えている。

普通、別荘は個人の所有でありプライベートな印象が強いが、ここでいう「みんなの草葺き宿」とは、住民・NPOで所有あるいは管理する草葺き屋根の家のことをいう。

「草葺き屋根」にこだわった理由は、草葺き屋根の風景イメージが「田舎暮らし」への気持ちをかきたて、宿泊利用を促進するものであり、景観や環境への配慮がはかれると同時に、「屋根の葺き作業」および、茅刈り作業（材料となる「茅」の確保）、火入れ（供給地である里山草原の管理）が「都市農村交流」などの形で農村グラウンドワーク活動を通じて行えるからである。

材料は屋根材となる茅（ススキ）だけでなく、間伐材（「草葺きの家」は古材や間伐材を多くつかいたい）の採取運搬や山林管理の協働作業として取り組むことが可能であり、「手作りの家」という温もりを演出することもできる。

そして、その外観について昔の民家を参考にすることで、農村景観の演出にもつながる。周囲

が棚田や雑木林など里地の環境であれば、池沼や水路、屋敷林などを設け、生物多様性を高めることでビオトープの中の家という位置付けにもなる。デザイン統一させたり、周囲に樹木を育成させることで、景観的な調和や季節感を演出させる。

以上が真庭地域で考えている「草葺きの郷づくりグリーンツーリズム推進構想」の概略である。

5) 草葺き民家所有者の連携

草葺きの家」を所有する人、「草葺きの家」に憧れる人が交流し、情報の交換をしたり、協力しあったりする組織があれば、失われる一方の「草葺きの家」が少しでも残るのではないかと思いいから、平成15年11月に金平坦氏（倉敷市在住）を会長とする“草葺き民家オーナーズクラブ”を結成することができた。

“オーナーズクラブ”なんて言ったら、なんとなく裕福でリッチに聞こえる。

草葺き屋根の家を所有している人の中には、そのよさやありがたさを十分に理解し、がんばっている人が多くいる。

残念なことであるが、そういう人たちもごく一部になってしまい、近くに相談する人もなく孤立化しているのも現状である。

このクラブは古い草葺き民家だけを残そうとするものではない。自然と共生する暮らしを楽しみながら、「田舎暮らし」や「都市農村交流」を推進し、新しい農村ライフ、地球環境時代のライフスタイルを“道楽”として楽しむ集まりでもある。

新しいデザインの「草葺きの家」をもちたい人、仲間を募って「草葺きの家」をもちたい人も歓迎する。これからは「草葺き家」を増やしていきたいと考えている。

茅場を共同で管理したり、みずから茅葺き技術を習ったりする中で、仲間が増えていけば、コストの軽減や維持管理も楽になる。新しいビジネスが生まれるかも知れない。

6) 事業家の連携組織形成

美しく管理された草葺き民家は、昔懐かしい農村原風景を演出するランドマークであり、地域の資源になるが、廃屋と化した民家は地域景観を阻害することもある。

真庭地域内に現存する草葺き家屋について、すべて公費をもって対応することは現実的に不可能である。

一方で、スローライフや田舎暮らし、自然との共生などへの憧れからか、古民家のリニューアルや移築再生などの経済活動も見られ、農村での生活を希望する都市生活者にはかなりの潜在需要があるとされている。

これら、市場（マーケット）を開拓し、新しい経済需要を発生させることで、失われゆく草葺き民家が保存再生されていくとともに、「田舎暮らし」や「建築資材のリサイクル」についての新しいビジネスモデルが生まれてくる。

真庭地域において「草葺き民家の保存再生」および「草葺き民家を地域資源として活用した村づくり・まちづくり」を展開していくために、ボランティア活動と平行して、環境（風景）ビジネスの展開させることも必要であり、そのための地元企業・事業所の連携組織づくりを進めることができた。

草葺き民家や古民家部材について、資源として有効活用していくためには、解体業者、産業廃棄物処分業者、民家の移築再生業者、工務店、建築設計事務所のほか、古民家の保存活用や再生リサイクルについての専門的知識と工事施工能力が必要とされるが、これらについては、複数の専門ノウハウが必要となり、事業者どうしの連携や情報交流が求められている。

あわせて、これらハード的なノウハウだけでは需要を発生させるのに不十分であることから、「田舎暮らし」や「草葺き民家の保存活用」、「都市農村交流」について情報の受発信能力がある住民・NPO等と企業事業者が連携し、市場（マーケット）の開拓を進めることが必要とされている。

現在、真庭遺産研究会では、再利用されることなく廃屋化し、風雨にさらわれ朽ち果てていく草葺き民家について、資源の有効活用や農村風景の保全、「田舎暮らし」のビジネス化を目的に、解体業者、産業廃棄物処分業者、民家の移築再生業者、工務店、建築設計事務所のほか、古民家の保存活用や再生リサイクル、都市農村交流、田舎暮らし、農村風景の保全に関心をもつ個人や事業者が「異業種交流的」に連携する組織づくりを「草葺き民家トラストネット事業」として進めている。

そして、草葺き民家の保存再生や古民家材の再利用をはかるため、情報を共有し、市場（マーケット）を開拓するための手段として、インターネット上に、真庭地域に見られる「草葺き民家（空家）」や「自然や風景、農村文化」、「民家再生活用」、「草葺きセカンドハウス」など「田舎暮らしを楽しむ」ための必要情報を紹介するホームページを開設に着手している。

連携するメンバー及び役割分担は以下の通りである。

真庭遺産研究会……全体調整、草葺き民家分布調査、田舎暮らし文化の掘り起こし

草葺きサミット関係の建築士……草葺き公共施設（自然館など）や古民家再生

草葺きサミット（草葺き友の会）……草葺き民家活用研究

檜木建材(有)……古民家廃材の情報収集、古民家廃材のストック管理

(有)真庭環境クリエート……古民家廃材の供給量の把握、古民家材のストック管理

小林不動産(株)……草葺き民家（空家）の情報収集

(有)ダイサン測量……草葺き民家（空家）の情報収集

大島技術コンサルタント(株)……草葺き民家（空家）の情報収集

NPO法人日本民家再生リサイクル協会……古民家再生の技術提供、情報提供

真庭森林組合……木材供給、山林資源の活用、茅場となる草原分布調査

(株)環境アセスメントセンター……茅場となる草原での植生調査、農村域における生態系調査

田中設計(株)……草葺き民家の再生活用

三和建設(株)……草葺き民家の再生活用

(株)タブチ……草葺き民家の再生活用

堀建設……草葺き民家の再生活用

母里建設(株)……草葺きセカンドハウスの企画開発

山下木材(株)……草葺きセカンドハウスの企画開発

院庄林業(株)……草葺きセカンドハウスの企画開発

三木工務店(株)……古民家廃材の部材活用

鳥越工業(株)……古民家廃材の部材活用

川西工務店(株)……古民家廃材の部材活用

八光(株)……草葺き修景舎の企画開発、民家の庭ビオトープの企画施工

(株)関西創美社……古材を活用した屋外サインの企画

村松木工所(株)……古材を活用した民家家具・調度の開発

(株)ソーケンプランニング……田舎暮らしビジネスの調査研究

御前酒辻本店(株)……田舎暮らし文化の掘り起こし活用

プ・ネルゆばりリゾート……田舎暮らし文化の掘り起こし活用

大庭屋旅館……田舎暮らし文化の掘り起こし活用

岡本旅館……田舎暮らし文化の掘り起こし活用

(有)岡田鮮魚……田舎暮らし文化の掘り起こし活用

まにわ美しい風景研究会……資源となる農村風景調査

印は中小企業

7) 情報の共有と発信の体制確立

真庭遺産研究会では、企業・事業所の協力協賛のもとに、懐かしい草葺き民家の風景など、真庭の美しい風景を紹介した環境ホームページの作成を進めている。

このホームページは、環境保全に力を入れ、また、真庭の美しい自然や風景を大切にしたいと希望する企業・事業所とともに、「ふるさと真庭」を紹介するもので、真庭に残る美しい自然や景観、風景のほか、真庭地域で取り組まれている景観（環境）保全活動や環境保全についての専門技術も掲載する。

企業の紹介は、単に企業情報や営業内容を紹介するというものでなく、真庭や日本の美しい風景写真を使用し、「ふるさと真庭」への「思い」や、環境保全へ取り組みなども紹介するものである。

したがって、作成するホームページは、「真庭地域の紹介」、「ふるさと真庭への思い」、「地元企業情報」、「環境保全専門技術」、「観光資源情報」などの中身を有する情報交流型、情報共有型のものになり、参加企業は、このホームページにより、情報を共有し、企業連携・異業種交流をはかることができると考えている。

5 . 今後の展開

(1) 現状の問題解決と次の事業展開

1) 草葺き民家を生かす取り組み

田舎暮らしの促進

真庭地域で、グリーンツーリズムを事業化・ビジネス化し、草葺き屋根の保存活用・再生を進める上で、複数の事業協同組合を立上げ、「草葺き民家トラストバンク」、「草原の保全と茅バンク」、「草葺きグラウンドワーク」を進め、「草葺き屋根のセカンドハウス」などのものづくりにも取り組んでいきたいと考えている。

「草葺き民家トラストバンク」は、「茅葺き家屋」についての情報管理システムでる。

今、真庭遺産研究会では、真庭郡内の茅葺き家屋について、町村別に分布調査を行っている。今までの調査で、真庭郡（約18,500戸）に500～600棟の「茅葺き家屋」が残存していることがわかった。

この中には文化財クラスのものから崩壊寸前の納屋まで含まれている。それらについて、「茅葺き民家台帳」を作成し、所有者の協力のもとに、利用状態、保存状態、立地条件、周辺環境、所有者の保存活用意欲、利用可能性などについて調査を進め、情報を管理していくシステムづくりを行い、グリーンツーリズムや都市農村交流、田舎暮らしを推進する中で、資源としての活用を考えていきたい。

普通この種のもは、空家情報になりやすいのであるが、農村文化情報や建築文化情報、民族文化財的な情報、周辺環境（自然・歴史）情報を入れることによりデジタルアーカイブ化をはかり、地域文化の紹介や継承活動も促進する。

環境ビジネスへの展開

屋根材としての「茅」や「草葺き技法」の利用を考える場合、より現実的なものとして、草葺き屋根をもちいた公園施設の導入である。今、多くみる休憩舎（東屋・四阿）やトイレ棟、交流施設など施設の多くは、既成品化し、地域の固有性を失っているばかりか、「地球環境にやさしい」といえないようなものも目立つ。

森の中、牧野の中、湖畔、街中など、それぞれの環境や立地条件に応じて、地域固有のデザインの草葺き屋根の施設を考えると、今までに無い公園イメージが思い浮かぶ。住民参加で考える施設や公園そのものがあってもよいと思う。

そして、それは新しく整備する公園施設に限らず、自然歩道の脇の休憩舎、街中の空き地を利用した緑地スペースなど、ちょっとした場所に草葺き屋根が出現するだけでも興味をそそる空間が生まれることとなる。

かつて、農村の川や野原、山は、美しく管理され、四季それぞれ、子供がいろんな遊びを楽しんでいた。ある意味で里山そのものが公園であった。池や小川があって、棚田があって、雑木林や山道のある林野域には、そのような里山の原風景が残されていた。そのような林野の近くには、梅や梨の花が咲くのどかな畑の風景、古い大きな民家、苔むした寺、神社、鎮守の杜、老木木を見ることができた。今、山林や農地の荒廃が懸念されている。

また、地方に立地する街の多くは、中心部が寂れるとともに、周辺の市街化や住宅地化が進み、地域性や個性、風景的な魅力を失いつつある。

そのような今日、真庭地域では、特色ある風景づくりとして、草葺き屋根の施設をシンボルあるいはアクセントに地域づくり、街づくりを考えることで、「茅」や「草葺き技法」を生かした環境ビジネスを展開させていきたい。

真庭遺産研究会では、新しいタイプの草葺き建築物として、山の中の自然域（樹林域）や草原風景の広がる山麓牧野での自然館やビジターセンターなどの公共的な建物を考えている。また、

共同で所有管理する草葺きセカンドハウスの建設や商品化を計画している。

草葺き屋根をもちいた公園施設の導入も公共事業活用の例であるが、環境緑化や土木工事に自然素材である茅や葦を利用することはできないであろうか。

今、どこの河川でも河原に繁茂するツルヨシ（葦）が水辺の景観を阻害し、人と水辺の距離を遠ざけている。この葦も草葺き屋根の材料となる。とくに、大山寺の宿坊などの豪雪地域では草葺き屋根にこの葦も利用されていると聞く。葦にも使い道はある。

コンクリートブロックを多用した河川工事による「ふるさと川」の自然や風景の喪失から、伝統的川づくり工法が見直されている。新潟県では、粗・（ソダ）と呼ばれる「木の枝や低木の幹」を集め束ねた自然素材が木工沈床など伝統的川づくり工法の見直しにより利用されているほか、伐採跡地の緑化などにも活用されていると聞く。

今後は、「ふるさとの川」の環境を再生させる里川工法をはじめ、ビオトープづくりなど、生物多用性の確保、地球温暖化防止に向けた都市緑化などの公共事業において葦（ヨシやツルヨシ）がつかわれるよう調査研究も進めていきたい。

2) 茅場を再生し活用する取り組み

草原の保全と茅バンク

草葺き民家を維持していく上で欠かせない茅場は、中国山地に広く分布し、その存在があつて牧歌的な農村風景と生物の生息環境が保全されてきた。

また、草原は、採草地や草刈場、茅場などとして、全国に広く分布し、生物多様性の保全と美しい山村景観を演出してきたが、現在、急激に失われつつある。

草原は、火入れ、放牧、採草という数百年以上に渡って繰り返されてきた農畜産の営みによって、日本各地に形成されてきた。主に入会地として利用、管理されてきた草原は、戦後には農畜産の近代化、近年にあつては牛肉の自由化により不要になり、衰退しつつある。

このような状況は全国各地でみられ、広域的な問題であることが多く、関係する地域が知恵を出し合つて、連携して環境保全活動を展開することが必要となっている。

このような現状を受け、全国草原シンポジウム・サミットは大分県久住（1995年）で始まり、過去5回行われてきた。これまで、草原に対する国民の関心を高めると共に、草原保全の考え方及び実践に関する議論や各地での取り組みが報告されてきた。

真庭遺産研究会では、平成15年10月に長野県諏訪市で開催された「第6回全国草原サミット・シンポジウムin霧ヶ峰」に参加し、草原としての茅場の保全再生について情報の収集とネットワークづくりを進めながら、「草原の保全」と「茅バンク」について調査研究を進めている。

「草原の保全と茅バンク」は、蒜山高原に広がる広大なススキ草原をはじめ、里山域に育つ「茅」を地域資源として活用し、美しい草原の環境の保全しようというものである。

茅場調査を継続し、茅場（里山草原）台帳を作成することで、利用可能な「茅場の分布」や生産可能な「茅の量」を把握し、美山町をはじめ、草葺き民家の修復や維持管理を考えている個人や団体に安価・安定的に供給するシステムをつくっていく。

そのためには、「茅場の環境管理」や「茅の刈り取り・保管・運搬」などを行う実働組織づくりが必要となるが、上手くいけば、コミュニティビジネスにつなげることができる。その意味でも、「草葺き屋根のセカンドハウス」や「草葺き公共施設・公園施設」などの需要を高めるアイデアも必要になる。

茅場台帳には、景観や生態系、植生、文化財の分布など、周辺環境情報を入れることによりデジタルアーカイブ化をはかり、農村風景の保全、里山ビオトープの再生、保健保養の場としての活用を考える。

「第7回全国草原サミット・シンポジウムin大山蒜山」の開催

大山から皆ヶ山、蒜山三座の麓に広がる高原農村域は、里山的環境要素の多い中国山地にあつて、雄大な眺望をみせ、草原、放牧場、高原野菜畑、樹林帯、湿地、沢、水田がモザイク状に入

り組んで、生物多様性に富んだ「水と緑の回廊」を形成している。

そこには、希少な植物種や植物群落も多く生育し、特別天然記念物オオサンショウウオなど珍しい生き物も多く棲息している。一方、美しい自然や風景に恵まれた地域であるが、火入れ（山焼き）など、古くから人の自然と共生する人のいとなみが見られ、草原の周囲には多くの文化財が散在している。

そのように、優れた自然と景観に恵まれた地域であるが、観光開発が進み、多くの観光客が訪れ、かつての美しい自然は次第に失われつつあるほか、高齢化や産業構造の変化による草刈り山（里山草原）の荒廃が懸念される。

大山と蒜山は連続する山岳自然域でありながら、鳥取県、岡山県の県境により隔てられていることから、環境保全における連携した地域活動が育っていない。

火山国「日本」では、富士山、羊蹄山、岩手山、岩木山、烏海山、大山などの火山麓に雄大かつ美しい風景がみられる。これら火山の多くは国立公園・国定公園に指定され、自然や景観が保全されているが、一歩公園区域外に踏み出すと、観光開発などにより、急激に環境が変貌していることから、生物多様性やビオトープとしての質が低下し、生態系の分断が見られる。あわせて、大型火山は市町村あるいは県境を越えて存在していることから、その環境の保全について広域的な活動連携が必要とされている。

そこで、「大山・蒜山地域の魅力とその環境保全の必要性を広く国民にアピールするとともに、様々な立場間における共同参画型草原保全の実践的な方法を探ること」を目的に、平成16年11月12日（金曜）、13日（土曜）、14日（日曜）と「第7回全国草原サミット・シンポジウムin 大山蒜山」を開催し、全国における草原関係市町村の首長が現状や取り組みを報告するサミット、講演、シンポジウム、現地見学等を行う。

今回の全国シンポジウムでは、大山蒜山地域における草原や火山麓の環境保全活動を検証事例として、「草原地域」および「火山麓地域」での環境保全に係る実践モデルを全国に向けて示す。

3) 美しい風景を守り育てる取り組み

自然保護だの、文化財保護だの、景観保全だのとかいえば、行政は動きやすい。そこに観光だとか、地域の活性化、都市農村交流といえば、さらに行政は載りやすい。

しかし、普通の市民住民には縁のない話しも多く、専門用語が出てくるともうついていけない。また、そこに人生哲学や歴史観・自然観を持ち込めば、わけのわからない世界に入り込んでしまう。

多くの人たちにとって、風景は「音楽」や「映画」のように楽しむものかも知れない。風景を観て、いろんな思いが浮かんだり、希望や勇気を得たり、安らぎや落ち着きをとりもどす。そういう人も多くいる。そして、カメラも普及し、写真や映像の世界に入り込んで来る人も増えた。まさに、感性の世界であるが、そういう人が多くいれば、「古い建物」や「農村の自然」も観る目が違ってきくる。

そういう人の中には、自然や歴史について専門知識をもっていないため、保存活動に参加していないが、風景を大切にすることに共感をもっている人は多くいる。

平成15年3月15日に発足した「まにわ美しい風景研究会」は、美しい「ふるさと真庭」の風景を大切にしたいという多くの真庭地域住民が参加できるような活動を目指しており、これまでの真庭遺産研究会の専門的な活動に加え、広く地域住民が参加できる「風景を楽しむグラウンドワーク活動」を推進していきたいと考えている。

あわせて、「草葎き民家トラストネット」のように、企業・事業所に「環境ビジネス」、「田舎暮らしビジネス」、「風景ビジネス」からの事業参画を求め、地域の風景を大切する活動へと展開させていきたいと考えている。

とりわけ、真庭遺産研究会では、草葎き文化（技術）や石積み技法のように農村に残るローテク文化や技術に着目し、これとハイテク技術（おもにインターネットを活用した情報通信技術）

とを結びつけ、風景（アナログ）と情報（デジタル）との融合による「風景ビジネス」を発生させることで、美しい自然や景観、風景の保全再生を目指して活動する計画である。

「風景ビジネス」・・・それは、「日本の美の伝承」であり、「伝統技法の継承」であり「農村文化の伝承」でもある。私たちが対象としたいのは、ほっておくと人知れず、消えていく「ローカルな日本遺産」や「農村原風景」、「ふるさとの自然」、「街の古いランドマーク」などもある。

「茅葺き屋根」のほか、「土蔵」や「石積み」、「里川（昔ながらの農村の川）」、「柿や梅の風景」など、日本の農村原風景をイメージさせるものは多くある。

「古い物だけ」を、「今あるものだけ」を対象とするとすると、「もつ人」と「もたざる人」の間の感情の差が生じる。「ワシら茅葺き民家所有者の苦労も知らないで、好きなことを言うな」で終わってしまっただけでは、参加意欲、協力意欲も失せてしまう。

「日本の美の伝承」、「伝統技法の継承」、「農村文化の伝承」を進めるためには、新しいものの中に、古いものの良さを積極的に取り入れる挑戦も必要である。

「古いものもつ人」だけでなく、「古いものをもたざる人」も「日常生活において日本の伝統美」を楽しみ、継承する仕組みづくりを考えている。

「草葺きグラウンドワーク」は、「セミプロ茅葺き職人」や「ボランティアによる茅葺き応援団」の育成や組織づくり、ネットワークづくりを考えている。また、茅葺き家屋の所有者どうしの応援協力体制づくりも考えている。

この場合、真庭郡内だけを見ても数的に限界があるので、「都市農村交流」や「京都美山町など茅葺き先進地との連携」が必要である。これには、一つの理念を明確にしたいと考えている。

4) 地域情報を生かす取り組み

真庭遺産研究会では、企業・事業所の協力協賛のもとに、懐かしい草葺き民家の風景など、真庭の美しい風景を紹介した環境ホームページの作成を進めている。

地域で活動する地元企業・事業所の情報収集能力については、驚くべきものがある。とりわけ、建築分野の事業者がもつ草葺き民家を含む古民家や住宅情報については、今後、草葺き民家を生かした地域づくり・風景づくりを進めていく上で、重要な情報が多くある。

あわせて、農村生活者（とくに高齢者）が有するローテク文化や技術についての情報は、これから、農村域においてスローライフや美しい風景づくりを進める上で欠くことのできないものである。

今後、「草葺き民家トラストネット」の活動を通じて、これら住宅分野やローテク分野で有用な情報が多くよせられると考えることができる。

あわせて、草葺き民家以外の空家や古民家、空家予備軍についても検討の目が入り、田舎暮らしをテーマに、都市と農村の共生・対流による「まちづくり」も期待できる。

さらには、ここで養った民家情報の管理システムにより、草葺き民家の保存だけでなく、日本の民家全体を結びつけるネットワークを形成させることが可能となり、これにより、「建物リサイクル」や「田舎暮らし」、「ローテク分野」での新しいビジネス展開が期待できる。

今後は、ホームページのデジタル博物館化を進め、草葺き民家をはじめ、土蔵、石積み、柿木の風景など「日本ローカル遺産」や「日本の美の伝承」など、全国各地からの情報とあわせて、地域内での有機的な情報のネットワーク組織を形成させていきたいと考えている。

6 . 活動のポイント

(1) 活動の人材

農山村域でボランティアの地域づくり活動・街づくり活動を展開していくにあたり、その人材確保は大きな課題である。その理由は人口が絶対的に少なく過疎高齢化が進行していることに加えて、兼業農家も多く、休日は農作業や山仕事、「部落つきあい」などがあり、ボランティア活動に参加する時間と余力が少ないことにある。そのような中、活動の人材を求めようとすると、定年退職者が多くなる。

真庭遺産研究会の構成員の多くが、60才以上の人間で、「地域づくり活動」に参加しているというよりも地域探訪などの生涯学習的な行事を楽しみに参加している人も多い。

それでは、なぜ、中高年でさえ、「地域づくり活動」への参加が少ないのかと言えば、これまで行政（自治体）が主導で「地域づくり活動」を展開し、住民はあくまで自治体に都合のよい協力者であったことにある。ようするに、地域づくり活動の主体が役場であり、多くの住民が傍観者にされつづけたのである。だから、農村域に暮らす多くの住民は、役場から声がかからないかぎり「地域づくり活動」に参加する術をもたず、多くの人は自由時間の多い定年退職後も自分たちの趣味の世界や生涯学習に生きるのである。

そのような状況の中で真庭遺産研究会では、地域の歴史探訪や環境セミナー、地域資源の掘り起こし活動など、生涯学習的な要素を加えながら「地域づくり活動」を展開している。

1) 中高年

農村域に暮らす中高年は兼業で農作業や山仕事に従事している人も多い、とくに高年者については、昔のスローライフを経験しており、ローテク技術を有する人材もいる。これら中高年が活動に参加してもらえよう生活文化に生きづいた活動展開を従来の真庭遺産研究会の掘り起こし活動に加え、「草葺き民家トラストネット」や「まにわ美しい風景研究会」を通じて模索していきたいと考えている。

2) 経営者

農村の企業の多くは、地場産業や公共事業に関係する中小企業であり、その企業数・事業所数も多く、それらが有機的に結び合う形で地域社会の一部を形成している。これら地元企業・事業所の経営者を活動に引き込むことは、若い人材や専門家を養成することにも通じることから、「草葺き民家トラストネット」を通じて、「環境ビジネス」、「田舎暮らしビジネス」、「風景ビジネス」からの活動参画を求めてきたいと考えている。

3) 中高生・女性

今の経済社会で、草葺き民家など昔のものを残し、風景や景観をよくしていくには、ある程度の努力が必要である。真庭（農村）の人の多くは、風景や景観、自然を大切にしたいと考えているが、その「思い」は、行動や活動になってあらわれるにはいたっていない。風景や景観をよくする人たちの裾野の広くし、結果、草葺き民家や古民家も大切にする地域の合意づくりも必要である。

真庭地域住民の中には、「風景づくり＝人的な景観形成＝観光＝多くの人の来訪＝環境悪化」を結びつけて考え、これまでの景観づくり活動や町並み保存活動に疑問を感じている人も少なくない。

そこで、「何のために、誰のために風景（景観）をよくするのか」についてもっと話しあう機会をもうけることも必要と考えている。そして、「風景、景観、ふるさとの自然」は「保存する」よりも、「楽しむ」という考えでいる方が、「大切にされる」という考えもある。今後は「風景も文化」という考えで、中高生や女性に活動参加を求める目的に「日本風景（景観）祭」や「国際風景祭」のような文化イベント的な感覚でのシンポジウムも検討したいと考えている。

4) 都市生活者

真庭地域をふるさともち、都市部で生活している人は少ない。これら人の多くは、ふるさと真庭の自然や風景が昔ながらのままで美しくあってほしいと望んでいる。しかしながら、これらの人々と「ふるさと真庭」をつなぐ情報ネットワークは十分でなく、組織だった活動は育っていない。

今後、真庭遺産研究会では、真庭の美しい自然や風景、文化遺産を紹介する「真庭ふるさとデジタル博物館」を開設することで、これら真庭をふるさともつ都市生活者との情報を共有し、連携を深めることで、新しい都市農村交流ネットワークを構築していきたいと考えている。

(2) 活動のための資金調達

真庭遺産研究会の活動資金は、ハウジングアンドコミュニティ財団など民間活動助成金などをあてているほか、昨年度は、国や県の公募型事業に応募し、岡山県より「中山間地域“協働”モデル事業」を受注しており活動を行っている。

しかし、「地域づくり活動」を継続的・発展的に進めていくためには、地元企業との連携は必要で、会員の専門知識やノウハウを生かして、地域の自然や風景・歴史文化を紹介する環境ホームページやガイドブックを作成し、企業コマースを掲載するなどの形で企業協賛金を集めている。これは、単に宣伝費として協賛金を集めるというのではなく、企業・事業所と地域づくり・街づくりの意見交換を行い、協働して地域づくりの提案を行おうというものである。

1) 企業との連携

真庭遺産研究会の活動や草葺きサミット関連行事は、各種活動助成金などのほか、会員のボランティア活動によって、企画運営しているが、ふるさと「真庭」の美しい自然や景観、風景を大切に活動を展開するにあたり、企業・事業所の協力協賛のもとに、懐かしい草葺き民家の風景など、真庭の美しい風景を紹介した環境ホームページの作成を進めている。

このホームページは、環境保全に力を入れ、また、真庭の美しい自然や風景を大切にしたいと希望する企業・事業所とともに、「ふるさと真庭」を紹介するもので、真庭に残る美しい自然や景観、風景のほか、真庭地域で取り込まれている景観（環境）保全活動や環境保全についての専門技術も掲載する。

企業の紹介は、単に企業情報や営業内容を紹介するというものでなく、真庭や日本の美しい風景写真を使用し、「ふるさと真庭」への「思い」や、環境保全へ取り組みなども紹介するものである。

したがって、作成するホームページは、「真庭地域の紹介」、「ふるさと真庭への思い」、「地元企業情報」、「環境保全専門技術」、「観光資源情報」などの中身を有する情報交流型、情報共有型のものになり、参加企業は、このホームページにより、情報を共有し、企業連携・異業種交流をはかることができると考えている。

そして、ホームページ作成のため企業・事業所から出資された資金の一部を活動経費へと充てることとしている。

今後は、草葺き民家をはじめ、土蔵、石積み、柿木の風景など「日本ローカル遺産」や「日本

の美の伝承」など、全国各地からの情報を集め、美しい日本の自然や風景をインターネット上で紹介するデジタル博物館の開設を進める中、地元企業以外、環境保全や日本の美しい自然や風景を大切にしたいと考えている国内大手企業や外資系企業との連携も視野に入れながら、活動資金の確保をはかっていきたいと考えている。

2) 風景情報ビジネスの展開

ホームページ作成において地元企業・事業所と連携し、情報を共有する中で、「草葺き民家トラストネット」など、地域の環境情報、田舎暮らし文化、ローテク技術の情報を収集発信する仕組みづくりを行い、ビジネス化をはかることにより、その収益を活動資金にあてていきたいと考えている。

3) 公募型行政事業への参画

真庭遺産研究会では、草葺き民家の保存活用についての全国組織「草葺きサミット準備会」を設けて、「草葺き文化の伝承」、「日本の美の継承」を目的とした調査研究や全国フォーラム・シンポジウムの開催を行っており、草葺き民家の保存活用については全国でも屈指の技術ノウハウとネットワーク網を養っている。

草葺き民家を活用した中山間地域の振興について、平成15年度、岡山県より中山間地域活性化「協働」モデル事業の委託を受けて「草葺き郷づくりグリーンツーリズム推進事業」を展開している。

これからも真庭遺産研究会の有する環境保全や風景の保全について専門ノウハウを生かし、積極的に公募型事業に参画することにより、岡山県真庭地域における草葺き民家の保存再生および草葺き民家を地域資源として活用した村づくり・まちづくりの展開を事業化し、活動資金の確保をはかりたいと考えている。

(3) 活動のネットワーク・支援

1) 地域内連携

まにわ美しい風景研究会による連携

平成15年3月15日に発足させた「まにわ美しい風景研究会」の活動として、以下の内容の草根運動を展開させていく。

“タウンミーティング的”な地域勉強会を開催する。

合併によって統合されるとしても真庭地域は広く、地域の自然や風景について、合併前の町村単位でも十分な情報発信や情報共有ができていないことから、現在の町村単位で講師や報告者を出し合って、“タウンミーティング的”な地域勉強会を開催することで、自然や風景(景観)についての勉強会を開催し、風景(景観)についての現状把握や情報発信・情報交流を行う。

“分科会的”なネットワークづくりを進める

真庭地域には、自然環境や風景・景観について様々な知識や能力を有する個人・団体が多く存在する。これら個人・団体は、環境や自然保護ばかりでなく観光、教育、行政、公共事業、農林業、文化芸術など様々な分野に属していることから、これら個人・団体の意向を聞きながら、ゆるやかな連携がとれるよう“分科会的”なネットワークづくりを進める。

草葺き民家トラストネットによる連携

「草葺き民家トラストネット事業」を展開させる中、ふるさと「真庭」の美しい自然や風景を大切にしようという企業・事業者さらには農業関係者が「環境ビジネス」、「田舎暮らしビジネス」、「風景ビジネス」を通じて連携できる仕組みづくりを構築していく。

真庭草葺き民家オーナーズクラブの設立

真庭郡（約18,500戸）に500～600棟の「茅葺き家屋」が残存していることがわかった。この中には文化財クラスのものから崩壊寸前の納屋まで含まれている。そのほとんどは金属板に覆われているが、昔ながらの草葺き屋根の景観をとどめているものの少数残存していることが知られている。

また、真庭地域には、蒜山高原を中心に「茅場となる草原」が広く分布していることが調査によって知られるようになった。

今後は、金属板に覆われたものを含むすべて草葺き民家について、「草葺き民家台帳」を作成し、所有者の協力のもとに、利用状態、保存状態、立地条件、周辺環境、所有者の保存活用意欲、利用可能性などについて調査を進め、情報を管理していくシステムづくりを行い、グリーンツーリズムや都市農村交流、田舎暮らしを推進する中で、資源としての活用を考えていきたい。

そして、保存意欲の強い所有者や今後、真庭地域で草葺き民家を共同購入（あるいは賃借）するなどして「新たに所有者」となりたい人を募って「真庭草葺きオーナーズクラブ」の設立や、草葺き民家を含む古民家や土蔵、棚田、風景木などの風景物も対象にした「まにわ遺産所有者クラブ」の設立も検討している。

2) 他地域との連携

草葺きシンポジウムなど、草葺きサミット関連の行事を開催する中で、岐阜県の白川郷や京都府の美山町、福島県の大内宿のように有名な茅ぶきの観光地のほか、「青森県新郷村」や「福岡県浮羽町」のように、全国には珍しい草葺き民家が集中する地域や多くの草葺き民家が残る地域が存在している。

また、日本民家再生リサイクル協会、日本ナショナルトラスト、茅葺きネットワーク（全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会）などの全国規模でこれら草葺き民家の保存再生活動を展開する組織のほか、「北村かやぶきの里保存会」、「茨城茅舎の会」のように、地域で保存活動に取り組むNPOや住民団体や存在することを知ることができた。

さらには、草葺き民家だけでなく、「市民文化財ネットワーク鳥取」や「沼隈町民家を大切にしよう会」など地域に残る古民家や武家屋敷、商家を保存しようという組織との交流を進めることができた。

今後は、「草葺き民家」や「茅場となる草原」の保存保全を含め、「日本の美しい自然や風景を大切にしたい」と全国各地で活動する他地域住民や市民団体との連携をはかりながら、真庭地域における草葺き民家の保存再生および草葺き民家を地域資源として活用した村づくり・まちづくりの展開を進めていきたいと考えている。

3) 近隣地域との連携

真庭地域をはじめ、老年期の山地地形からなる中国山地の源流域では、大いなる大自然の中、優れた自然や素晴らしい森林や溪谷の景観が存在する一方で、古くから人の手が入り、人と自然とが共生する温もりのある山村風景や歴史文化がみられる。

そこには、鳥取県智頭町や岡山県苫田郡（阿波村、鏡野町、加茂町）、英田郡（西粟倉村、東粟倉村、大原町、作東町）、兵庫県上月町のように、真庭地域以上に草葺き民家が多く残る地域がみられる。

このような愛すべき源流地域ではあるが、現在、過疎高齢化や産業構造の変化にともない、草葺き民家や庄屋屋敷など、かつて見られた伝統的建築物や美しい山村風景、伝統文化が失われつつある。加えて、手入れ不足で荒廃した植林地も多くみられ、かつて源流域が有していた国土保全機能や水源涵養機能、保健保養性、生物多様性が低下しつつある。

このような中、求められているのが住民・NPO等による環境保全の活動であるが、過疎高齢化が進行している源流町村では、活動する人間が少数固定化し、行政とのパートナーシップをはかるにも情報不足、専門性不足、人材不足などの問題に直面する。

これを解決する方策として、都市農村交流が考えられるが、自然観・価値観の違いや交通距離の問題、生活文化の違いなどから多くの障害も見えてくる。

そこで考えたのが、価値観や境遇を同じくする源流地域同士の環境保全交流である。

幸いにして、県境や町村境という行政的な区域わりは存在するものの、源流域において隣接する町村では、古くから人的・血縁的な交流も多くみられ、お互いの地域や生活文化を知り合える位置にある。加えて、同様の地域課題や「ふるさとへの思い」を抱いており、山村ならではの温かい人情や、同じ境遇にあるものどうしの連帯感もある。

平成15年10月18日に、中国山地に位置し、美しい源流の自然域を有する町村において環境保全活動を展開する個人・団体が鳥取県智頭町・岡山県西粟倉村に集まり、それぞれの活動や「ふるさとの自然」について語り合う交流会（ちづ源流環境フォーラム、）を開催しているが、この集まりを契機に町村境・県境を越えた大きな源流環境保全の取り組みやネットワークが生まれ育っていくことを期待される。

このような源流地域での連携を「草葺き民家の保存活用」と結びつけていきたいと考えている。